

私は、日本が誇れる「助け合いの精神」を大切にすかかりつけ医となり、多職種連携のチーム医療で、地域住民の健康を支えたい。

私が地域医療について考える時、最初に思い浮ぶのは先日 96 才で亡くなった曾祖父のことだ。徳島県鳴門市の海のそばで生まれ育った曾祖父は、前日まで大好きな刺身とビールを食し自宅で亡くなった。私たちが千葉県から帰省する度に自分で釣った美味しい魚を振る舞ってくれた曾祖父は、腎臓病と少し認知症の症状があり一時はサービス付き高齢者施設に入居したが、「どうしても刺身が食べたい」と自宅での生活を望んだ。曾祖父の性分をよく知るかかりつけ医のアドバイスもあり自宅へ戻ったが、同居する 70 代の祖父母はまだ現役で働いており、曾祖父の望みを叶えるべく献身的に介護した祖父母の負担は相当だったと、遠く離れた千葉県からでさえ感じる。

同時に曾祖父の介護を支えてくれたホームヘルパーやデイサービスの存在も大きかったと祖父母から聞いた。決して社交的とはいえない曾祖父が週 3 回楽しみに通っていたデイサービスでは、スタッフの方々が曾祖父の意思を尊重し居心地の良い時間を作って下さっていたのだろう。その間祖父母は自分たちの仕事に専念できたという。各職種の方々がそれぞれの機能を活かし思いやりを持って接して下さったからこそ祖父母も助けられ、曾祖父が望む生活を送ることができたと思う。曾祖父と支える祖父母の様子を見て今や医療と介護は切り離せないと感じる。できる限り住み慣れた場所で安心して生活を継続し、人生の最期を迎えられるためには、多職種協働による地域包括ケアシステムの推進がますます必要になることを身をもって実感した。

時代の変化とともに医師に求められることも大きく変わる。これからは「治す医療」だけではなく「支える医療」が求められると考える。私は患者さんの臓器機能と全身のバランスをとりながら少しでも自立した生活を支えるために総合診療を学びたい。また、以前から参加している子ども食堂のボランティアも継続したい。それまで知らなかった地域の現状を知ると共に、参加している高齢者の方の充実感に満ち溢れた生きいきとした姿に刺激を受けた。ある年配の女性が「恵まれない境遇の子どもたちの役に立っていることが生きがいになっている」と話してくれた。これからの超高齢化社会において、高齢者が尊厳を持って、健康で幸せに暮らすためのヒントがそこにあると思った。「困った時はお互い様」という言葉があるように日本には昔から「助け合いの精神」がある。地域医療において、患者の病態だけではなく、患者を取り巻く環境や人のつながりにも目を向け、多職種が連携してコミュニティの中で医療に取り組んだ時、世界最速で高齢化が進む日本において、人が健康寿命を長くして幸せに暮らせる為の地域医療が、他国にとってのモデルになり得ると考える。